



大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

人文社会系研究指標を考える

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
後藤真

アウトライン

- 0・データ整備の重要性→基礎データの不足
- 1. 人文学の特徴？アウトプット・アウトカムの多様性
- 2. 特徴を踏まえた指標の可能性はあるか？
- 3. 指標のあるべき姿とは？

自己紹介

- 後藤真
- 国立歴史民俗博物館 准教授
- 2015年秋まで 人間文化研究機構本部
- その後、歴博に
- 専門は人文情報学（特に歴史資料のデジタル化）
- この文脈で研究評価等に関わることに



前提：いま、国立大学で起こっている事態

- 一部の指標を用いた予算の傾斜配分
 - 例：Top10%論文の予算総額割による順位付け
- 一面的な指標の利用方法であるという批判
- 各地で指標がどのようにあるべきかなどの検討・提言が進んでいる→日本学術会議 国立大学協会など
- 人文社会系も例外ではない→しかし現状では課題が多いのも事実 と、同時にこのままでは人社系はより大きな危機に立たされる可能性も
- 人社系の多様な指標の開発が急務



とはいえ 基礎データの不足

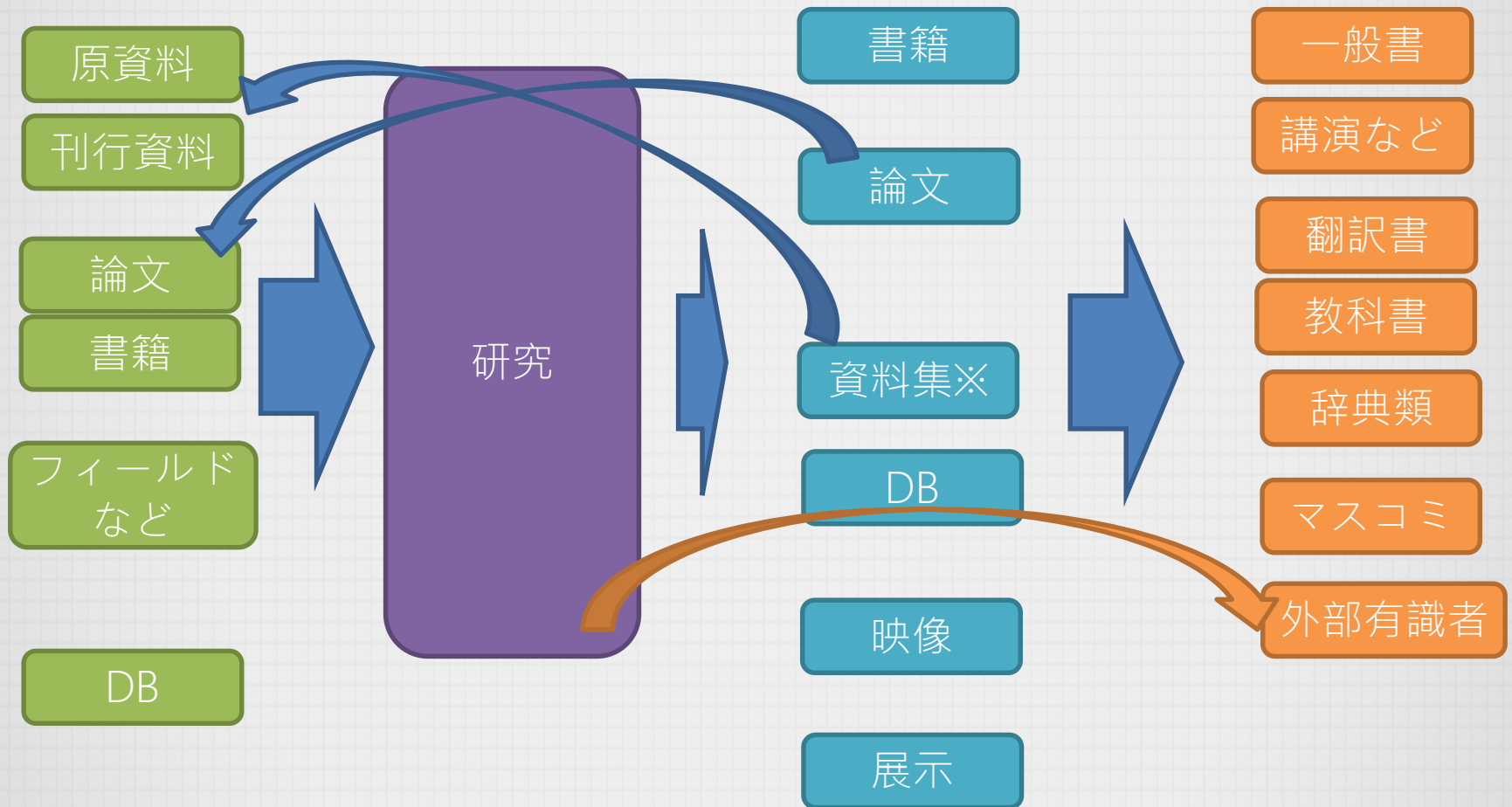
- そもそもデータがない！
- 研究成果は文章で書かれているということは、自然科学でも、工学でも、人文社会科学でも同様→一定の計量方法はある、はず
- それらの指標を活用することで、広く人文社会研究の可視化を行うことはできる
- もちろん、他分野と同一線上では測れない
- これまでに、それらの論点を整理してきた
 - － 著書・著者数・言語・論文の引用速度など



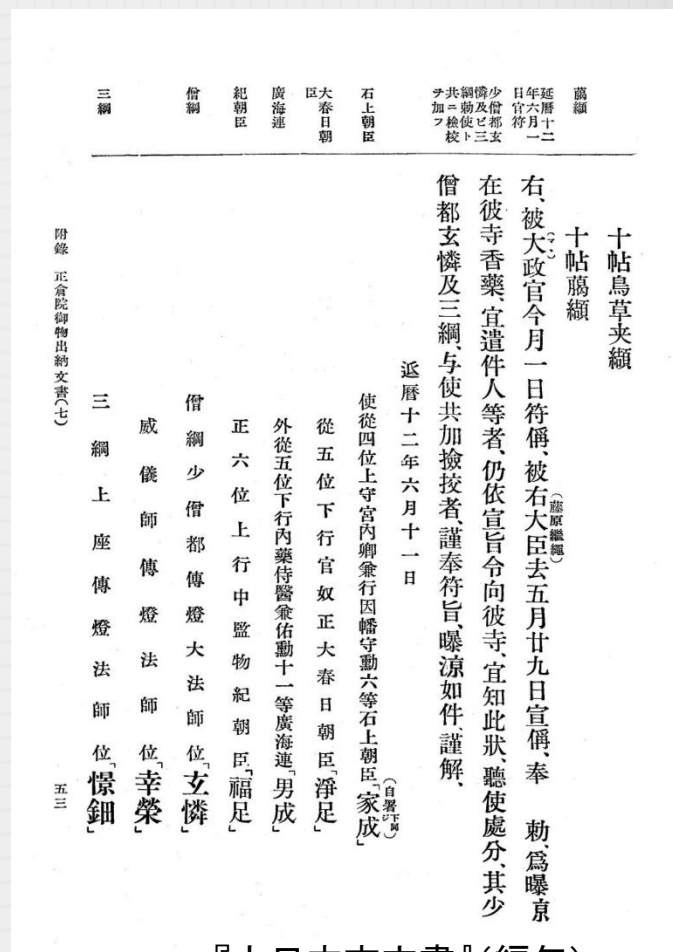
アウトプット・アウトカムの多様性

- 著書や展示、動画などをどのように考えるか
- アウトプットになりにくいインパクトをどのように考えるか（外部の有識者委員など）
- 共同利用機関として→基盤づくり
 - － データベース構築・資料そのもの・図書の「所蔵」
 - － 資料集作成・目録作成 etc.

人文学の研究の関係



資料集



『大日本古文書』(編年)
 東京大学史料編纂所編
 CC BY-NC-SA

しかし

- 現状ではこれらを厳密に把握する方法はない
- 多様なものを「媒体」単位で把握することは難しい？
- 研究の「質」を見るための工夫はもう一つ必要ではあるが（後述）
- 様々な取り組みを進めている

人文機構の取り組みとして

- さまざまな研究の可視化を考える
 - － 「サイエンスマップ」
 - － 質的にどのように評価するのか
- 人文系評価システム検討委員会及び作業部会
 - － 作業部会を特に6月までに集中的に実施
 - － いくつかの課題に対する提言と指標への考え方を提示すべく準備中



論文の記述内容に着目した、解析とマッピングによる人文研究の成果表示システムの構築 (人文系サイエンスマップ) Science Map In the Humanities

ねらい

- ・ 人文系の研究成果を可視化すること
- ・ 特に量ではなく、その質と多様性に注目
- ・ これまでと異なる「研究世界」の創出

手法

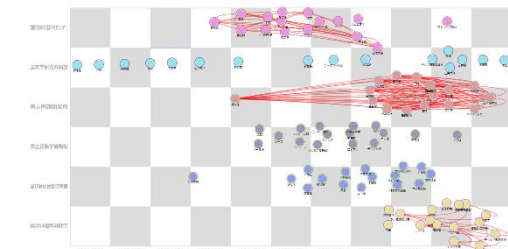
- ・ 人文機構のリポジトリにある論文（約15000本）をクロールしスキャン
- ・ テキストデータをもとに類似の用語をクラスタリング
- ・ クラスタリングしたものを平面上におとしこむ

※ある検索キーワードを入れ、そのマップを表示

検索キーワード

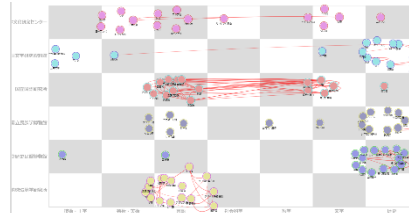
検索

例1：鹿児島・方言で検索



機関別クラスタリング表示（横軸：年代 縦軸：機関）

- ・ 国語研（上から3つ目）は2000年代後半から関連性の強い研究を集中的に出している
- ・ 民博（上から4つ目）は中心的ではない地域の言語研究がコンスタントに行われる
- ・ 日文研は2000年前後に多く研究があるが、近年はあまり対象としていない



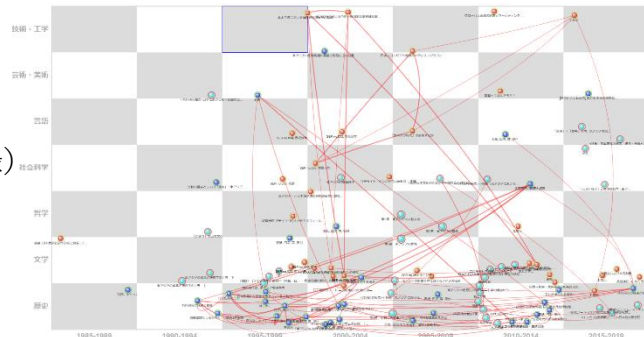
分野別表示（縦軸：研究分野 縦軸：機関）

- ・ 国語研（赤）は言語学に集中した研究である一方で日文研（ピンク）の分野は広い。
- ・ 民博・歴博（青）は言語と歴史の両分野にまたがる

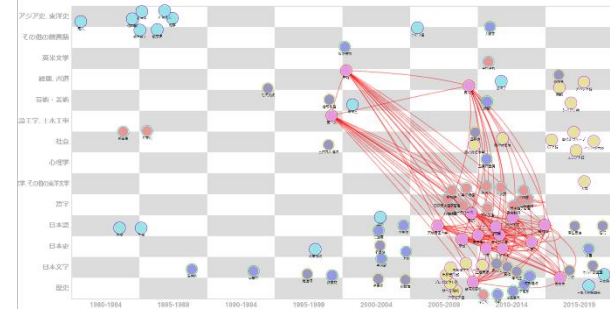
例2：東アジアで検索

論文1件ごと分割表示
(3機関のみ・縦軸：分野
横軸：年代)

- ・ 歴博は歴史中心（濃い青）
- ・ 日文研も歴史が多い（青緑）
- ・ 民博は分野横断型（赤）



詳細分野別表示（6機関） 機構全体では2000年代後半から、より広い分野を対象とした研究が増えている



特徴

- ・ 研究の傾向が年代別・機関別・分野別などから分析
- ・ 単純な論文の量や引用等ではない、研究の広がりをつながりをあきらかに
- ・ リポジトリへのリンクもあるので、リポジトリのマップ上検索システムとしても利用可能
- ・ クローリングは他大学等のものも可能であり、今後は他大学等との関係性分析などを実施予定



大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

人文学的指標の考え方（個人）

- 基本的考え方
 - － （内容としても成果の出方としても）多様な研究の活動量
 - 論文、著書（専門書・一般書・資料集 etc.）、展示、映像
 - － 社会的なインパクトへの評価
 - 専門的な知見をもととした人間の生活そのものへの還元
 - 国や自治体等の委員、新聞やWeb媒体等への成果執筆、新聞書評等を通じた専門書の還元など
- 近年の要請（学術分科会による「人文学・社会科学が先導する未来社会の共創に向けて（審議のまとめ）」）
 - － 国際的な研究指標 国際共同研究やそれにもとづく成果
 - － 学際的な研究指標 複数の研究機関の議論など



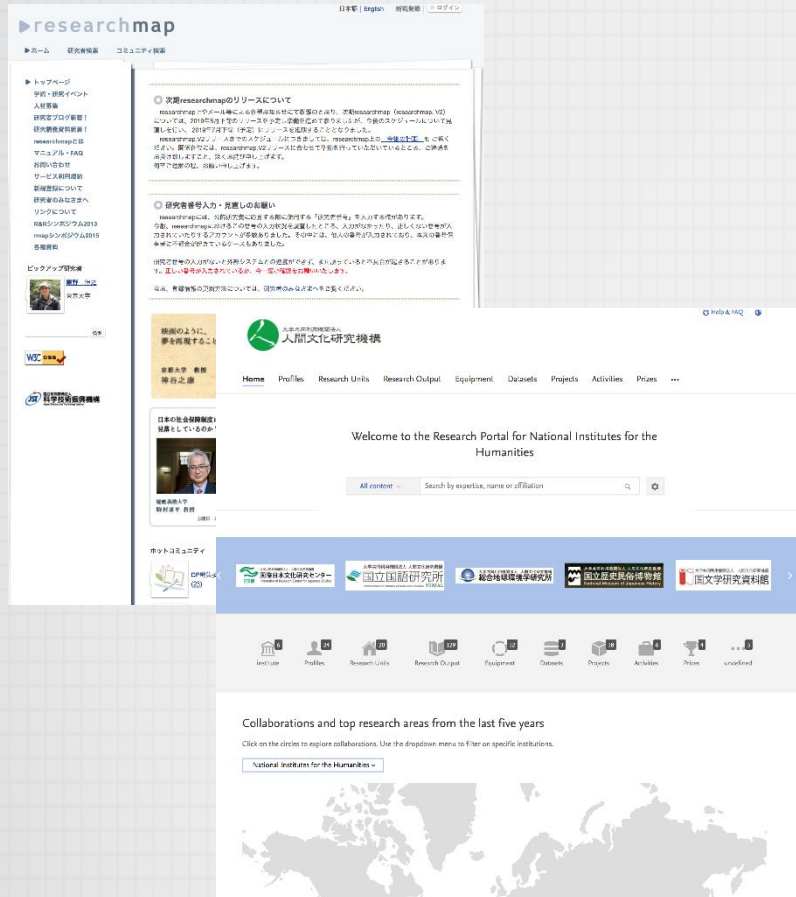
研究活動量および社会的インパクト（個人の例示）

13

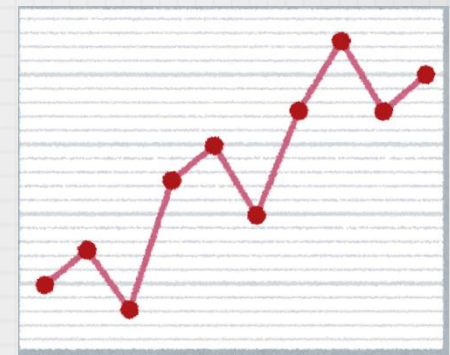
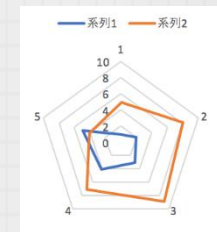
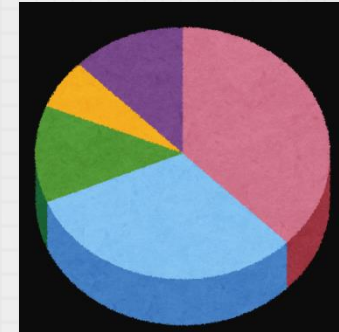
- 多様な研究成果や社会的活動に対して、一定の係数を
 - － 例：研究であれば論文1に対して著書＊　展示は研究活動を＊とし、社会的成果を＊として見積もるなど（あくまでも例示であり、確定していません）
 - － そのうえで両者の活動を効果的に評価する
 - － 対象となるデータ候補
 - 論文・単著・分担執筆・口頭発表・映像および音声・データベース構築件数・招待講演・資料集・事典等・翻訳単著・翻訳共著・展示回数・一般書・一般向けシンポ・新聞等・成果メディア掲載・学会役員・国・自治体等委員・受賞・国際共同研究論文・国際共同研究単著・国際共同研究共著・国際共同研究発表
 - － 研究者のデータベース等からとる
 - － 期間はおおむね10年間か（人社系の研究スパンの「長さ」）



考え方



抽出・係数をかけて分析



研究者データベース類

可視化

課題

- データをそろえるコスト
- この考え方の中で「質」を見るか？→基本的には別の議論とすべき
- 係数を分野単位でどこまで細かくするか
- 社会的インパクトの係数基準



引用を考える

- 資料集を引用する 報告書を引用する
→その資料集が「使える」ものであるという証左
- 基礎的な文献を引用する
- 人文学の場合、かなりネガティブな評価でも引用するが
– そのことに意味がないわけではない

引用だけでよいので、書籍と論文の引用データベースは構築する必要がある



原則として

- 指標は道具である→「組織の何を見るか」に即して参照するものであり、万能な指標は存在しない
- そもそも、論文数で測るのはなぜか？→研究が進むと論文を書く（であろう）←論文が多いほうがより研究が進んでいる
- よい論文は多くの研究者が引用する（であろう）←よく引用されている論文は良い論文である
- この「仮定」を成り立たせているものは何か？



指標が見るべきものとは

- 学問の進展のアセスメントツール
- 活動量？ 活動の質？
- どれぐらい世間に成果が伝わっているのか？
- 直接的には「派手なもの」しか見えにくい
- 指標などにして、多くのものを見せる必要性



人文学の研究のあり方とは何か？

- 究極の目的は？

- 社会のコンフリクト回避（人の多様性を知る・抑圧構造を学び回避する） 人類の生命の質向上（よりよく生きる）

- 人類の多様性を学ぶ（時間軸・空間軸・文化などの軸）

- 何をすればそれらを学ぶ材料が提供できているのか？

- その材料を提供するための基礎的アウトプットはどのようにあるべきか？

- そのアウトプットを行うための研究はどのような活動であるべきか

人文学の可視化のための指標

- 学問の多様性が見えるように
 - いくつかの指標はすでに存在する iMD
 - 研究の「厚み」は人文学の多様性につながる
 - 多様な活動が多様性を担保する
 - 一つの指標ではなく、いかに総合的に研究を見ていくか
 - (もし評価の話に触れるなら) この多様性や厚みや総合性を評価するために、多くの指標の可能性を考えるべきではないだろうか

